

## 調査報告

# 正福寺裏山二号古墳測量調査の報告

## 備南に於ける前方後方墳の確認

山口 哲 晶

### 一、はじめに

去る五年前の昭和五九年、正福寺裏山古墳群の一号古墳の墳丘測量調査において、一号古墳の墳形が今まで福山市史等の文献で述べられている如くの前方後円墳というよりはむしろ尾根上に築かれた円墳の可能性の強い事を一九八五年（昭和六一年）、当会の機関紙である「山城志」第八集に於て指摘した。

今回、同古墳群の二号古墳（山城志第八集に於て合の坪古墳として新たに命名することも併せて提案した）の墳形についても各種の文献より前方後円墳として紹介されており、又葺石、埴輪等の存在も指摘されていた為、備後の南部地域においても数の少ない前方後円墳としての墳形を確認、併せて正福寺裏山古墳群のまとめとして当二号古墳（合の坪古墳）の墳丘測量調査を実施し、当初の墳形について以下の結果を確認し得たのでここに報告する。

### 二、位置及び環境

本古墳は福山市加茂町字下加茂の正福寺の丁度背後にあたるほぼ東に伸びる尾根上に存在する。当古墳の所在する福山市加茂町は芦田川が形成した神辺平野の北縁に位置し、南北に流れる加茂川を以て東西に丘陵が延びており、備南地方の古墳密集地帯の中心的な位置にあたる。その西側の丘陵より東南に派生する標高七十メートル、水田との比高約三十メートルの尾根上に本古墳は存在している。当古墳の存在する尾根より八十メートル西上方には先年当会古墳研究部会により墳丘測量調査を実施した正福寺裏山一号古墳が存在し、当古墳と併せて正福寺裏山古墳群を形成している。さらに一号古墳はもとより、二号古墳からの眺望も加茂平野が一望のもとに見渡せる好所であり、極めて良好な位置を占めている。

周囲には当古墳の所在する西側の丘陵に倉田池をはさんで北方に終末期古墳の猪の子一号古墳、さらに内山古墳群、倉田古墳群、上組古墳群が存在し、西南方向には下加茂古墳群、掛迫北古墳群があり、さらに三



- |            |          |
|------------|----------|
| 1 正福寺裏山古墳群 | 2 倉田古墳群  |
| 3 猪の子古墳    | 4 上組古墳群  |
| 5 中野古墳群    | 6 石鎚一号古墳 |
| 7 掛迫六号墳    |          |

後方部の各辺は円墳と異なり直線で構成され、各コーナーは九十度の角度をもって方形に復原する事ができる。又、前方部の存在は西側のくびれ部が土砂の流出により崩れ判然としなが東側のくびれ部は良好に残存しており、前方部をそれと復原できる。さらに前方部先端が少し盛り上った形を呈している。又、後方部と前方部との比高は

角縁神獸鏡を出土した備前地方では数少ない竪穴式石室二基を有する中期古墳の掛迫六号古墳を含む掛迫古墳群から駅家の法成寺西上古墳群へと続いている。  
又、当古墳から加茂川をはさんだ平野の東側丘陵には丁度当古墳の中軸線の延長線上に列石をもった円墳で、中国製の斜縁二神二獸鏡を副葬し

ていた前期古墳の石鎚一号古墳が存在し、さらにその北東の菱原池に突き出た尾根上には五世紀前半より六世紀後半頃まで営まれた吹越古墳群、さらに神辺の中条より加茂に通ずる道路のある谷をはさんで北方には中野古墳群が存在し、まさに当古墳の周辺は古墳の密集地帯となっている。

### 三、調査の結果

#### (1) 墳形について

墳形は測量図に示す如く前方後円墳の後円部が方形を呈する、所謂前方後方墳である事が明らかになった。

墳丘規模は全長二十九メートル、後方部長十七メートル、後方部幅十三メートル、高さ三メートル、前方部長十二メートル、前方部幅七メートル、高さ一・五メートルを測る。後方部については、墳丘が細長い尾根を最大限に利用している為か純然たる正方形ではなく縦に細長い長方形の形を呈する。

一・五メートルを測り、後方部に比べ前方部が低い形式である事が判る。つまり墳形は全長二十九メートルの縦に細長い後方部を有し、後方部より低い前方部をもって構成される前方後方墳であることが判明した。

## (2) 外部施設について

外部施設については、福山市史上巻の「正福寺山前方後円墳」の項に「表面は葺石でおおわれて埴輪円筒片が散在している。」と記載され、又広島県立府中高等学校生徒会地歴部の「古代吉備品治国の古墳について」では「合の坪前方後円墳」として紹介され、同じく葺石、埴輪片が散在していると報告されているが、踏査したところ現状に於ては葺石及び埴輪片ともに少なくとも墳丘表面に於ては確認する事ができなかった。

## (3) 内部主体について

内部主体については、広島県立府中高等学校生徒会地歴部の「古代吉備品治国の古墳について」（一九六七年）によると「主体部は後円部の頂上中央に竪穴式石室が一ヶ所、主軸を古墳の主軸に平行して埋れているらしく、その部分の地面が幅一・七メートル、長さ三・九メートルの範囲にわたってややくぼんでいる。おそらく石室の四隅が内側にたるんで、天井石がそれだけ沈下しているのであろう。」と記載されているが、後方部頂をボーリングステッキにて確認したところ石材の使用の可能性はなく、木棺直葬あるいは粘土槨等の石材を使用しない埋葬施設が考えられる。

## 四、前方後方墳について

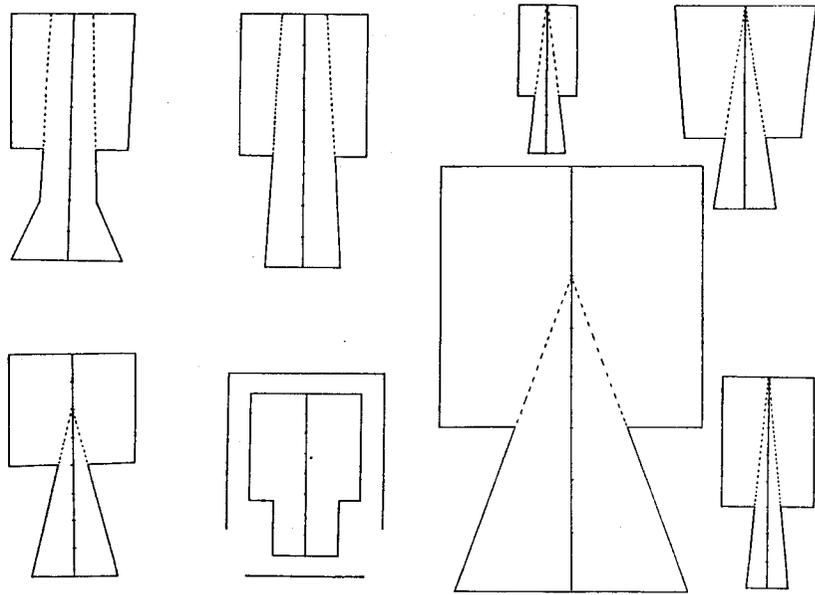
全国的にはもとより備南地方に於ても数少ない前方後方墳について、「前方後方墳」というものが現在においてどの様にとらえられているかについて簡単に述べておかねばならないと思う。

### (1) 形態について

前方後方墳というものは文字通り前方後方形であり平面プランは矩形あるいは方形と三角形の結合が基本となる。しかし、概念としては野津左馬之助は「前方後円墳の後円部を方形に築ける」とし、後藤守一、大塚初重両氏は「方墳の前に前方部を設けた」とし、さらに近藤義郎氏は「方墳の前面に祭壇を付設したもの」と言われる様に各々研究者に於てそのニュアンスを異にしている。

### (2) 構築される選地について

大別して山頂及び尾根上に構築されるグループと生活面に近い台地上に構築されたグループに別られ、全体的には山頂及び尾根上に構築されたものが圧倒的に多い。この事は前方後方墳の選地が山頂他界観の強い影響下に構築されたものであり、特に弥生時代の墓制の伝統を強く反映したものと理解できる。さらに弥生時代墓制の中には平地に埋葬された集団と山頂に埋葬された集団があり、山頂に埋葬された集団がこの様な



(茂木雅博「前方後方墳」1984より転載)

前方後方墳を生成させたと解する。しかも、生活面に近い台地上に構築されたグループは墳丘封土が全て盛土であるのに対し山頂に構築されたグループは殆んど地上を墳丘として加工している例が多い。この事は弥生時代の墓制の大半が地山面に掘り込まれている点を考えればこれも選地同様に弥生時代墓制の影響を強く受けたものと解される。

### (3) 内部主体について

埋葬施設に関しては粘土槨が左例的に多く堅穴式石室は吉備と畿内に集中し、横穴式石室は出雲に非常に多い。

前述の如く前方後方墳の成立が弥生時代墓制を基盤として存在しているのに対し、古い時期の前方後方墳は突如として構築されるという違いがある。それは前方後方墳の内部主体が弥生時代の墓制をひきつぐ粘土槨や木棺直葬であるのに対し、前方後方墳は前方後方墳よりはるかに長大な粘土槨や堅穴式石室が構築されるという特徴をもっている。又、前方後方墳の中に殆んど粘土床、木棺直葬という埋葬施設を有しない事も前方後方墳が弥生時代の墓制の踏襲と認められる。

その原因を推論すれば第一に吉備を中心に前方後方墳が大形高塚古墳として構築され、その後前方後方墳が畿内を中心に構築され得る為、前方後方墳の埋葬施設に大形化の傾向が現われるとみる事ができるかもしれない。第二に畿内を中心に発展する前方後方墳の首長連合と吉備を中心として前方後方墳を奥津城とする首長連合の対立する時期と解し、やがて前方後方墳を盟主とする畿内連合政権が吉備を圧した為に前方後方

墳が全国的に構築されたと解する事もできる。

#### (4) 発生期の問題

前方後方墳が弥生時代の墓制の踏襲として山頂及び尾根上に構築されたと解いたが、その基本思想の山頂他界観については前期古墳にあらわれるのではなく、吉備に於ては弥生時代墓制にすでにみる事ができる。吉備に於ても最も古い時期の高塚古墳である都月一号墳（前方後方墳）は同じく最も古い時期の古墳である車塚古墳（前方後方墳）に対し在地的強い墓制の中に成立し、その内容にかなりの差を有している。それは埴輪の存在である。都月一号墳には在地的性の非常に強い特殊円筒埴輪が発見されているのに対し車塚にはそれが存在していない。にも拘らず土師器が少量検出されている。この両者の差異は時間的なものなのか、あるいは被葬者の性格によるものか、あるいは他に原因を求めねばならないのかは明確にし難いが、この特殊円筒埴輪の存在は都月一号墳が吉備の強い在地的性の中から前方後方墳を成立させたことを意味する。しかし、都月一号墳及び車塚を構築した政権の首長は両古墳の二代で終りをづけ、所謂造山、作山古墳を生み出した首長は大和政権下に入った体制内豪族にすぎず吉備独自の古墳文化を發展し得たものではなかった。やがて都月一号墳、車塚古墳を最後にその地をはなれ、美作に中心を移し変形した状態でその後前方後方墳を發展していったものと思われる。

吉備を中心に前方後方墳が構築された時期は前方後円墳の構築と相前後している。前方後方墳と前方後円墳との両者の間にはかなりの差が明

確である。その較差が吉備を中心として大和政権に対抗したとみられる節もあるし、あるいは又、前方後円墳を奥津城とする大和政権に先行してこの種の古墳を中心とする政治連合とみることもできる。

都月一号墳、車塚古墳と何らかの政治関係を結んだであろう前方後方墳が各地につくられ、前方後円墳のそれとかなり較差を有していた事、さらに出雲、関東に後期になって構築されたものは前方後円墳のそれと何ら相違なくなっている。そして車塚古墳構築時までに各地につくられた大形古墳は数の上では前方後円墳と大差がなかったと思われるがそれ以後圧倒的に前方後円墳が多くなる事も事実である。このことを大和政権の勢力伸張とみる事はもはや一般化しているといえよう。

#### 五、まとめ

正福寺裏山二号古墳は全長二十九メートルの前方後方墳という特異な形を呈する古墳であることが明らかになった。

現在、広島県内で確認されている前方後方墳は、湯釜古墳（広島市）、上矢口古墳（広島市）、善法寺九号古墳（三次市）、千ガ寺一号古墳（庄原市）で、前方後方墳の可能性を有しているものとしては宇那木二号古墳（広島市）、蔵王原古墳（福山市）であり、備南地方で確認された前方後方墳としては当古墳が最初である。

古墳の密集地帯である当地域に前方後方墳が存在したという事は当地域の古墳時代を考える上に於て極めて重要な意味を有するといえよう。

しかし、全国的にも数が少なく、又全容の明らかになった例も少なく今後の研究の成果に期待せねばならないであろう。

又、当古墳の主軸の延長線上に前期古墳の石鎚一号古墳が存在するが、この古墳と何らかの関係があったものと思われるが今後の課題である。

## 六、おわりに

正福寺裏山二号古墳を測量調査するにあたり広島県立葦陽高等学校郷土史研究部員、広島県立府中高等学校地歴部員、福山市立城東中学校生徒、当会員の方々の多大な協力を得たのでここに記して感謝の意を表したい。

最後に本来ならばこの様な重要な成果をもっと早く報告せねばならなかったのであるが種々の事由により遅くなってしまったことを深くお詫びする次第である。

## △参考文献▽

茂木雅博『前方後方墳』

雄山閣出版 昭和五九年

第Ⅲ図 正福寺裏山2号古墳測量図  
(単位はメートル・スケール200分の1)

